



武士道 は おもいやり道

心
あ
っ
た
か
ニ
ュ
ー
ス

NMCAA
NO3

前号で、第一次世界大戦中に四国にあった、板東俘虜收容所のドイツ兵と住民の今も続く交流のお話でした。今号では、その收容所の所長

松江豊寿さんについてです。当時の日本には、捕虜は恥であり、不名誉という考えがあつたそうです。他の日本の收容所では、捕虜に対しては環境も悪く、暴力もあつたようです。

板東收容所が他と違つたのは、所長である松江豊寿さんの「武士の情け、これを根幹として捕虜を取り扱いたい」という思いがあつたからです。捕虜は、犯罪者ではなく、祖国のために戦い敗れた勇者である。

とよく言つたそうです。実は、松江所長の父親は戊辰戦争で負けた会津の出身で、会津から青森に移され捕虜同様に、辛く悲惨な生活を強いられた時代があつたそうです。開かれた收容所でしたが、ある日、この收容所に来たばかりの兵が脱走したことがあります。

その時松江所長は、どうせ周囲は山と海で逃げられない、怪我などしないうちに我々の手で保護したい。と待ちます。脱走した捕虜が戻つてきます。「山の中で迷つた。それでよろう」と済ませようと思つた。それでは、しめしがつかないという部下に松江所長は諭します。傷の手当をしてくれたのは、この坂東の人だろ。だとすれば、決して口を割るまい。それを明かさなないのは、恩義を感じているからだ。脱走兵を助けたことで、坂東の人に罪に問われることがないようにしたい。目をつぶらう。武士の情けじゃないか。」松江所長の思い通りにすべていったわけでもなく、松江所長の寛容な態度が過ぎると、陸軍省に呼び出され、叱責されていたようです。收容所の経費を嫌がらせのように、減額もされました。松江所長が、山を購入し、捕虜が木を切つて、燃料にあて経費をねん出したりもしました。ドイツの敗戦が決まり、捕虜達が国に帰ることが決まると、坂東の人々への感謝にベートーベンの第九の演奏を決めます。演奏前にドイツ将校があいさつをします。戦鬪に敗れ、我々は捕虜となつてこの地に参りました。

私は今、誇りをもってこの地を去ることができません。それは松江所長のおかげです。松江所長は、私の人生で最もつらい時期に勇氣と力を与えてくれた。我々はベートーベンの「プロイデ・歓喜」を感謝のしるしとして、皆さんにプレゼントしたい。世界のどこに坂東のよくな收容所があつたか。世界のどこに松江のような所長が・・・と声を詰まらせた。そして松江所長のとこに歩み寄り愛用のステッキを差しだし言います、我が友に「そして嵐のような拍手が沸き起こりました。」

（エーチューブより）

編集後記

松江所長の言う武士道の情けとは、自分より弱いものをあわれんで、思いやることだそうです。私は相手の身になり、気持ちを察して行動することだと思ひます。そういう武士道は人に勇氣と力を与えらるるのだと思ひました。